

叛亂が起り、やがてこれに呼應した黃巢（コウソウ）の賊のために、先ず江淮が蹂躪され、次いで廣州も陥つて（八七八年）、十二萬と稱される程の多數に上つたサラセン人以下の在留外人が殺戮され、ために南海貿易も一時杜絶するような状態に立到ると、唐王朝もいよいよ滅亡せざるを得なくなつたのである（九〇二年）。

## 二 隋唐文化の統一性

隋唐文化の第一の特色は、時代の大勢からも察しられるように、兩漢以來幾多の紆餘曲折を経、複雑な變遷を重ねて來た中國の文化、殊に南北朝以來は江南・江北に分れて、殆んど別々の發展過程を辿つて來た中國の文化を統一し、集大成したところに在る。即ち、本來北朝の系統を引く隋唐の兩王朝では、國家組織の根本をなす法律や制度は、貴族主義的な南朝に較べて、國家主義的な色彩が強く、この點において確かに、より有力であつた北朝系統のそれを、殆んどそのままに受繼いで、更にこれを完備したのである。しかし概して保守的であり、傳統の束縛を脱し切れなかつた北朝文化は、一般に進歩的であり、より自由な發過を遂げた南朝文化に比して、どうしても遜色のあることを免れなかつたから、學問や藝術の分野では、自ら南朝のそれが主流とならざるを得なかつたのである。

**經學** 例えば經學、即ち儒教の學問についてこれを考えてみるならば、漢唐間の經學は文獻學的研究を主とする、いわゆる訓詁學（くんこがく）で、師弟もしくは父子相傳を原則とし、「疏は注を破らず」と云うことばからしても明かなように、師說を變じて新說を立てることなどは、當時一般には思いもよらず、兩漢の經學を統一した